

犬山学



第6回・第7回犬山学サロン開催
第6回犬山地層勉強会



雲錦九寸皿

第6回犬山学サロン 「日本刀と犬山の歴史」

開催日時:2019年3月2日(土)14:00~15:00 場所:名古屋経済大学図書館1階ホール

刀剣はいつの時代、どの国にも存在したが、日本では熱田神宮などの多くの神社で刀剣をご神体としていること、また、2019年現在で1116件指定されている国宝のうち約1割が刀剣であることなどからも、日本人が刀剣を単なる武器としてではなく、信仰や畏敬の対象としてまた美術品として特別な価値を与えてきたことを示しているといえよう。

日本において鉄製の刀剣は2~3世紀に大陸からもたらされた。それらは、正倉院などに伝わり、古墳などから多く出土するが、直刀であり、諸刃のものもある。刀剣が日本で製作された時期について、現物が確認できる最も古い刀工は10世紀末であるが、大陸渡来の刀剣と日本の刀剣とは、決定的な製法の違いがある。それは、前者が単一の鉄で制作されたのに対して、後者は、純度の低い鉄を中心に、高い鉄を外側という二重構造になっていること、焼入れという加工(刃文)を施していること、さらに刀身に反りがあることである。これにより、折れず、曲がらず、よく切れるという特徴を持った日本刀が誕生した。

それらの主要生産地は、古い時代から順に、大和、山城、備前、相模、美濃があげられる。政治的中心地の地位の喪失、戦乱、災害などにより他地域が衰退するなか、美濃を中心とする木曾三川地域は室町後期以降主要生産地となった。それは、この地域に、駿河今川、尾張織田、三河徳川など多くの有力大名が存在し、その間の戦いの発生による需要があったこと、また、交通・物流の拠点(木曾三川水運、東海道・東山道・中山道)であり、素材(砂鉄、木炭)の入手、製品の搬出に有利という地理的条件が存在したことによる。

この地域が、そのような大量の需要をいわば一手に引き受けることができた最大の理由は、そこに「座」による生産の組織化・分業化および販売方式の確立を伴っていたからである。そうした「座」の下で、一元的に生産・流通を管理することにより、純然たる経済活動としての刀剣の生産が可能とされた。これは歴史上この地域だけの現象であって、ここに日本の製造業の拠点としての今日の東海地方の原型を見ることができるのではないか。刀剣製造は当時のハイテク産業であり、製鉄・加工・関連部門を含む、すそ野の広い産業であった。また刀剣は戦場において使用される武器として検証されるので、製造過程における様々な工夫が要求された。その結果、実用的な美濃刀の評価が確立することになる。

犬山における本格的な日本刀生産は、江戸時代初期

における木曾川の対岸の関などからの刀工の移住から始まる。徳川による天下統一により、刀剣の大量需要・生産は終焉の時代を迎え、多くの刀工は廃業・転業を余儀なくされるが、一部は各地の城下町へ移住して鍛刀を行った(美濃出身刀工は名前に兼を使用している者が多い)。犬山では、多くの刀工が鍛冶屋町に居住している。元和3年(1617年)尾張藩付家老成瀬正成が犬山城主となるが、城下の刀工は成瀬家に抱えられていた者が多く、その後の転封・移封がなかったため、犬山と名古屋は、江戸時代を通じて尾張地方の主要な刀剣生産地となる。

犬山の刀剣は、犬山城白帝文庫、熱田神宮、針綱神社、徳川美術館そして三光稲荷神社などに保存されている。犬山城白帝文庫には、地元尾張・犬山の刀工による作品が多く所蔵されており、そのうち、道暁(天保)「尾州犬山住道暁天保十四卯仲秋以木曾川水焯之」がある。また、熱田神宮には、愛知県指定文化財である、「尾州犬山住兼武三州安濃住人平岩七兵衛元吉慶長拾六年霜月吉日」と銘打たれた太刀が所蔵されており、また、針綱神社には、犬山市指定文化財である薙刀の「尾州犬山住兼武作」が保存されている。犬山に関する刀剣は、以上に伝わるもの以外に、個人の所蔵するものもあると聞く。犬山のみでなくわが国における貴重な文化財である、それらの全体の目録の作成と公開を切に望みたい。



犬山鍛冶屋町の案内表示



講師プロフィール

名古屋経済大学副学長

富岡 仁

名古屋大学大学院法学研究科博士課程、
東北学院大学法学部教授、名古屋経済大学法学部教授を経て現職。専門は国際法学。
公益財団法人日本美術刀剣保存協会会員

第7回犬山学サロン 「尾関家と犬山焼の関わり」

開催日時：2019年6月4日(火)16:30～18:00 場所：名古屋経済大学 5B2

犬山焼と尾関家の関わりについて、とは言え関わりについてとなればその歴史についても私の知る(聞いた)範囲で触れない訳にもいかないと思いますのでその辺りから始めたいと思います。

犬山焼の始まりは宝暦年間から今井村宮ヶ洞で美濃焼系の陶工によって焼成されていました。その窯は安永10(1781)年三代目窯主奥村太右衛門が亡くなるとともに終わりを告げました。それから約30年後の文化7(1810)年、当時の犬山城主成瀬正壽は今井窯の廃絶を惜しんで犬山焼の再興を図り、島屋惣九郎に命じて丸山窯を創業させたと言われています。この丸山窯でどの様な作品が造られていたのか実は良く分かっておりません。文化14(1817)年綿屋大島太兵衛が丸山窯を引き継ぎ同年7月、京都栗田の陶工藤兵衛、九兵衛を雇入れ製品の改良を試みますが中々上手く行かなかった様です。そこで成瀬家の知行所であった春日井郡上志段味村から加藤清蔵を招きました。清蔵はロクロの名工で窯焼きにも熟練していたらしく、丸山に住んで作陶に専念してかなりの成果を取めた様です。天保初(1830)年に大島太兵衛が経営から手を引くこととなり、城主は清蔵に資金を出して窯主としました。天保2(1831)年に松原惣兵衛が志段味から来て赤絵付けを始め同6(1835)年に惣兵衛の伝で陶画工道平が雇い入れられました。清蔵の窯で惣兵衛、道平が赤絵を描く体制が確立して犬山焼は発展期を迎えていきます。



古犬山雲錦手茶盃

天保9(1838)年8代城主となった成瀬正住は城郭内の三光寺御殿の庭に絵付け窯を築かせ、明代の呉須赤絵の大皿や鉢等を手本にした呉須赤絵写や春秋に因ん

で桜と紅葉を描いた雲錦手や犬山八景など今日まで続く犬山焼の意匠が確立していきました。

その頃尾関家は、春日井郡林村で瓦製造業を営んでいました。文政10(1827)年成瀬家の御用瓦師高山市郎兵衛の株を譲り受け、始めは余坂に、その後丸山に瓦窯を移し瓦を製造しつつ清蔵、惣兵衛を援助していた様ですが両名の経営が不振となり、慶応2(1866)年初代作十郎信業は、犬山焼製造を願い出て窯株を譲り受ける事になりました。

明治6(1873)年頃清蔵と惣兵衛は高齢のため廃業となり、犬山焼の経営は尾関家に移り明治9(1876)年愛知県令より瓦製造窯と陶器製造窯の許可状を受け、明治10(1877)年第一回内國勸業博覧會へ出品、さらに各府県の博覧會や共進會に出品し技術の革新に努めました。

明治16(1883)年、犬山町内外から出資者を募って、犬山陶器会社を設立しましたが、明治24(1891)年濃尾大地震が起き工房等が大破したためついに会社は解散のやむなきに至りました。その後二代作十郎信美によって窯は復興されましたが、以後の犬山焼は尾関窯を含むそれぞれの個人事業となり(最盛期は八軒ほどがあり今は三軒です)現在まで続いています。



明治十年内國勸業博覧會褒状



講師プロフィール

犬山焼本窯元 尾関作十郎陶房
七代尾関作十郎

尾関 立志

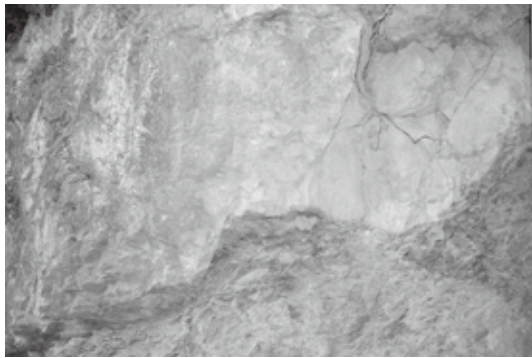
昭和42年 六代尾関作十郎の長男として犬山に生まれる
昭和60年 愛知県立瀬戸窯業高校卒業
昭和62年 同専攻科修了
京都の清水焼の高野昭阿弥の下で絵付けの修行を約4年行い、以後は実家にて絵付けをしている。
今年で30年目。

第6回犬山地層勉強会 「東三河ジオパーク構想の現状-犬山地域のジオパークに向けて-

開催日時：2019年7月11日(木)15:30~17:00 場所：犬山商工会議所会館4階大研修室

ジオパークは、保全、地域振興、教育の三機能があり、世界で求められている持続可能な開発(Sustainable Development Goals, SDGs)の面からも理にかなった活動である。

東三河ジオパークへの取り組みは、豊橋市自然史博物館で2013年6月16日に開催されたシンポジウム「めざせ!東三河にジオパーク!」に始まる。そこで、趣旨として以下の3つをかけた。①東三河は天然記念物、名所、国定公園、自然公園、〇〇百選に指定された箇所が多い。②東日本大震災から2年、自然災害や地形・地質にも興味関心が高まっている。③豊橋平野と奥三河の文化を繋ぐ地域振興策の一つになる。



中央構造線(長篠露頭:新城市天然記念物)

東三河のジオパーク構想エリアは、日本列島地体構造区分においては内帯側に領家帯、外帯側に三波川帯、秩父帯が位置している。東西性にのびる長大な中央構造線が南北性に方向を変える場である。日本列島が大陸から離れ今の位置に近づいた時の設楽火山の活動の歴史が残る。その後、数回の海進と海退や、基盤の上昇と侵食により、現在の地形地質及び動植物相が形成されてきた。それゆえ、多様な自然が現在も見られ、恵みを得ている。構想エリア内には、100を超えるジオサイト候補があるが、その内の約40か所を紹介した。



馬の背岩(国の天然記念物・新城市)

犬山エリアのジオサイトの候補について、主要なものについて紹介した。吉田初三郎『愛知県鳥観図』(1927)には観光地として日本八景木曾川、木曾川ノ鵜飼、犬山遊園地、継鹿雄山、尾張富士、入鹿池などが記述されてい

る。1927年7月10日の新愛知新聞(中日新聞)には、「全愛知縣下新十名所選定」に尾張富士がランクインしている。尾張富士は、『尾張名所図会』(1880)に入鹿大池の背景にも配置されている。

犬山の基盤は、丹波-美濃帯に属し、ジュラ紀の付加体の放散虫チャート層などからできている。木曾川の対岸には、三疊紀とジュラ紀の境界あたりで起こったとされる無酸素事件の証拠とされる黒色チャート層がある。栗栖からは中期ジュラ紀のアンモナイト *Choffatia (Subgrossouvria) sp.* を産している。また、マンガン鉱を胎胚している地層もあり、鉱山跡も残っている。江戸時代から「竈石」として利用された新第三紀中新世の地層は、メタセコイアの化石も産出している。尾張学派の祖水谷豊文の命名したヒツパタコの自生地は、国の天然記念物に指定されている。これらは、すべてジオサイトとしての候補地となる。



「竈石」に利用された地層(犬山市善野野)

犬山は、既存の観光地をジオの視点で再構築することは可能である。また、犬山単独なのか、木曾川を挟んだ自治体を入れるのかのエリア設定や、小中学校における「ジオ教育」の実践もジオパーク認定には鍵となる。



講師プロフィール

豊橋市自然史博物館館長
松岡 敬二

1954年広島県神石高原町(旧油木町)生まれ。1987年理学博士(名古屋大学)。豊橋市自然史博物館開館時に就職。地下資源館長、主幹学芸員、副館長兼事務長を経て2010年から館長。その間、東三河ジオパーク構想を主導。2015年3月定年退職後、4月から非常勤館長。愛知大学、岐阜大学、島根大学の非常勤講師。学会は日本古生物学会、日本貝類学会、日本展示学会、化石研究会、ため池研究会、日本郷土かるた協会などに所属。編著・監修・共著書は『琵琶湖の自然史』(八坂書房)、『恐竜と絶滅した生き物』(世界文化社)、『博物館資料論』、『展示論』(雄山閣)、『新化石の研究法』(共立出版)、『進化のかるた』(奥野かるた店)、『ため池と水田の生き物図鑑』(トンボ出版)、『愛知県史別編自然』(愛知県)、『古地図で楽しむ三河』・『三河国名所図絵解き散歩』(風媒社)、『絶滅どうぶつ図鑑』(ハルコ出版)、『展示学事典』(丸善出版)など。